（様式１）

令和４年度　自　　己　　評　　価　　表

愛媛県立伊予高等学校
学校番号（29）

教育方針	豊かな人間性を育てる教育の推進	重点目標	自らの力で、自らの未来を切り拓く生徒の育成 ～「個別最適な学び」と「協働的な学び」を通して～

領域	評価項目	具体的目標	評価	目標の達成状況	次年度の改善方策
学習指導	分かる授業の展開	授業がよく分かると実感できる生徒100% Ａ：70%以上　Ｂ：60%以上　Ｃ：50%以上 Ｄ：40%以上　Ｅ：30%未満	B	生徒の約8割、教員の9割が肯定的な評価を行っていることから、昨年度に引き続き、「分かる授業」が生徒と教員の共通の土台の上に成立している。	教科や学年が連携することで、生徒一人一人が興味・関心を持てるような授業内容の工夫を行い、生徒の授業に対する満足度を高める必要がある。
	主体的な学びの推進	課題を解決するため、意欲的に授業に取り組む生徒100% Ａ：80%以上　Ｂ：70%以上　Ｃ：60%以上 Ｄ：50%以上　Ｅ：50%未満	A	約9割の生徒が、授業に対して課題意識を持って取り組んでいると答えていた。本校の特色である科目選択が、主体的に学ぶ力の育成において一定の効果をあげている。	個に応じた科目選択を行うことが、学力の向上、そして進路実現につながっていることを生徒に伝え、主体性を伸ばしていきたい。
生活指導	基本的生活習慣の確立	あいさつのできる生徒100% Ａ：100%　Ｂ：80%以上　Ｃ：60%以上 Ｄ：40%以上　Ｅ：40%未満	B	コロナの影響もあり、挨拶が十分にできない生徒も増えてきている。大きな声を出す機会が少ないので、全体的に「明るさ」「元気よさ」が欠ける傾向にある。	大きな声を出せなくても、心を込めて自分から丁寧に挨拶をすることはできる。適切な指導・支援を通して社会性を育て、気持ちの良い挨拶につなげたい。
		５分前登校ができる生徒100% Ａ：90%以上　Ｂ：80%以上　Ｃ：70%以上 Ｄ：60%以上　Ｅ：60%未満	B	全体的には指導が定着しており、良好な状態であるが、下級生の5分前遅刻が多い。心身や家庭の問題等もあり、特定の生徒が繰り返す状況が増えている。	5分前登校指導だけでなく、教育相談係や学年団と協力し、生徒をサポートしながら改善を目指したい。
		交通ルールを守る生徒100% Ａ：90%以上　Ｂ：80%以上　Ｃ：70%以上 Ｄ：60%以上　Ｅ：60%未満	B	交通事故報告件数は減少したが、「ヘルメット無着用」「イヤホン着用」「ながらスマホ」の指導が増えている。自転車の「並進」による苦情も少なからずあった。	引き続き、交通ルールを守ることが自他の命を守ることにつながるということを粘り強く指導していきたい。
	教育相談体制の充実	相談できる相手がいる生徒100% Ａ：100%　Ｂ：90%以上　Ｃ：80%以上 Ｄ：70%以上　Ｅ：70%未満	B	「いじめ」等についてのアンケートで「私は、相談できる相手がいます。」と回答した生徒は92%だった。学校評価アンケートの「伊予高校では先生に悩みなどを相談しやすい雰囲気ができていると思いますか。」に対して「思う」「だいたい思う」が73%（昨年70%）だった。	自分にとって話しやすく信頼できる相手に相談すること、電話やSNS相談があることを繰り返し伝え、誰かに相談するきっかけをつくる。また、「教育相談室から」を活用して、教員を身近に感じて話しやすい雰囲気作りに努める。
特別活動	学校行事の充実	生徒・保護者の学校行事への満足度100% Ａ：95%以上　Ｂ：85%以上　Ｃ：75%以上 Ｄ：65%以上　Ｅ：65%未満	C	新型コロナウイルス感染症対策が緩和されたこともあり、生徒の主体的な活動の場が増えた。また、その活動を保護者や地域の方へ公開できたことが昨年度以上の評価につながったと考えられる。生徒は82%、保護者は84%が充実していると答えている。	運動会、文化祭ともに生徒の主体的な活動の場を増やすとともに、一般公開を行う。保護者、地域の方々に参加していただけるよう内容を更に見直し、活性化・レベルアップに努めていきたい。
	部活動の活性化	部活動をとおして心身を成長させることができたと思う生徒100% Ａ：90%以上　Ｂ：85%以上　Ｃ：80%以上 Ｄ：75%以上　Ｅ：75%未満	B	部活動への加入率は高く、転・退部する生徒は少ない。再開された大会やコンクールに向けて生徒の活動意欲を喚起する指導者の工夫・研究が高評価につながったと考えられる。	部活動を手段として、どう将来に生かすことができるかを考えて取り組ませたい。生徒・保護者・教員が納得することのできる部活動運営を推進していきたい。
	ボランティア活動や地域のイベントへの意欲的な参加	ボランティア活動、地域交流などのイベントに年間10回以上参加 Ａ：７回以上　Ｂ：５回以上　Ｃ：３回以上 Ｄ：１回以上　Ｅ：参加なし	D	活動への参加意欲が高い生徒は多いが、コロナ禍で活動の場が激減した。活動の場が減ってしまったことが低評価につながったと考えられる。募金活動には積極的に協力できた。	地元の地域交流行事へ積極的に参加したり、「総合的な探究の時間」を生かすなどの工夫で、地域との連携を更に深めていきたい。

※ 評価は５段階（Ａ：十分な成果があった　Ｂ：かなりの成果があった　Ｃ：一応の成果があった　Ｄ：あまり成果がなかった　Ｅ：成果がなかった）とする。

（様式１）

令和４年度　自　　己　　評　　価　　表

愛媛県立伊予高等学校
学校番号（29）

領域	評価項目	具体的目標	評価	目標の達成状況	次年度の改善方策
特別活動	地域との連携	地域と連携した取組を行い、情報発信の回数が年間100件以上 Ａ：80件以上　Ｂ：70件以上　Ｃ：60件以上 Ｄ：50件以上　Ｅ：50件未満	C	今年度は、40周年記念行事として地域と連携した取組が多く見られた。その中で、「総合的な探究の時間」の授業の一環として外部と連携した取組がほとんどを占めている。	松前町を始めとした地域と連携しながら地域資源を活用した探究型学習の実践を行い、ホームページ等で紹介する機会を増やしていきたい。
進路指導	進路指導体制の充実	ホームルーム担任の個別面談を年６回以上実施 Ａ：６回以上　Ｂ：４回以上　Ｃ：３回 Ｄ：２回　Ｅ：２回未満	B	学年やクラス差はあるものの、科目選択や進路選択の重要なポイントで、適宜実施できた。	必要な生徒に対して、回数にこだわらず柔軟に対応できるよう、進路課と学年が連携を取りながら実施していきたい。
		進路希望実現100％ Ａ：100％　Ｂ：80％以上　Ｃ：60％以上 Ｄ：40％以上　Ｅ：40％未満	B	現段階で、ほとんどの生徒が４月当初の進路希望の第１、２志望校への進学が可能な状況であるが、まだ数名の生徒が進路が定まらないなどの理由で今後も受験予定である。	可能な限り早期の進路目標の設定を促していきたい。また、進路目標と現段階での学力差を把握させ、達成するための具体的な取組について助言していきたい。
		国公立大学合格20名、松山大学合格100名	B	地元志向の生徒が多く、県外の国公立大学を挑戦する生徒はほぼいない状態だが、松山大学については現段階で目標は達成できている。	国公立大学については、引き続き個別指導を充実させていくことが大切である。また、生徒数が減少しているので、実合格率に目標設定を変更したい。
人権教育	人権・同和教育の充実	人権意識が高揚したと実感した生徒100％ Ａ：100％　Ｂ：90％以上　Ｃ：80％以上 Ｄ：70％以上　Ｅ：70％未満	B	学校評価アンケートで「人権・同和教育ホームルーム活動に積極的に参加できた」と「思う」「だいたい思う」と答えた生徒が91％だった。また、３年生へのアンケートの「伊予高校での学習によって、あなたの人権問題に対する関心はどう変わりましたか」に対して「とても高まった」「ある程度高まった」と回答した生徒が90％だった。	生徒同士でコミュニケーションを取りながら互いの違いに気付いたり認め合ったりできる活動や、生徒に身近な人権問題を取り上げて学習する機会を増やし、人権問題が自分自身に深く関係することを実感させたい。
		自他の存在を大切だと思える生徒100％ Ａ：100％　Ｂ：90％以上　Ｃ：80％以上 Ｄ：70％以上　Ｅ：70％未満	B	「いじめ」等についてのアンケートで「私は、自分のことを大切に思っています。」「私は、周囲の人たちのことを大切に思っています。」と回答した生徒はそれぞれ、92％、97％だった。	同アンケートで「私は、周囲の人たちから大切に思われています。」と答えた生徒は95％だった。５％の生徒が、自分が大切に思われていないと感じているようである。生徒の頑張りを認めたり励ましたりしながら、全ての生徒が自己肯定できるように、また、自他を大切に思えるように支援する。
読書指導	読書を通した自己練磨	年間読書冊数　20冊 Ａ：20冊以上　Ｂ：10冊以上　Ｃ：５冊以上 Ｄ：１冊以上　Ｅ：０冊	C	Ａは10％，Ｂ15％，Ｃ18％，Ｄが48％と最多であった。Ｅの0冊と回答した生徒が9％いた。普段の情報源について、９割がテレビとＳＮＳからと回答しており、文字情報の少なさが気になる。「朝の読書」は７割の生徒が積極的に取り組んでいると答えており、活字を読む行為自体、朝の読書が主なものになっている現実がある。生活習慣の中での読書の割合をいかに増やしていくかが今後の課題であると考えられる。	冊数だけでは望ましい読書ができているかどうかを測ることは難しい。読書冊数に、ジャンルを加えて調査する必要がある。難解な書籍では冊数は期待できないが、読み深めることが生徒には必要である。「朝の読書」の取り組みは継続しながら、それ以外の読書の時間を持てるような習慣付けを図っていきたい。
業務改善	教職員の業務と職場環境の改善	業務の効率化と職場環境の改善が進んでいると感じる教職員100％ Ａ：90％以上　Ｂ：80％以上　Ｃ：70％以上 Ｄ：60％以上　Ｅ：60％未満	A	業務の効率化と職場環境の改善に継続的に取り組んでいるという認識は、教職員全般に共有されている。	取組の効果を教職員が実感できるよう工夫に努めたい。

※ 評価は５段階（Ａ：十分な成果があった　Ｂ：かなりの成果があった　Ｃ：一応の成果があった　Ｄ：あまり成果がなかった　Ｅ：成果がなかった）とする。